

雅俗語対訳辞書の国語学的研究

— 詞葉新雅・雅語譯解・類聚雅俗言を資料として —

高橋 永行

はじめに

近世期には初学者が古典を研究するための便宜を図る目的で、雅言と俗言を対訳した辞書（雅俗語対訳辞書）が国学者の手によって編纂されている。これらの辞書類は辞書史上の発達段階の途中に位置付けられる。本論では『詞葉新雅』（富士谷御杖編・1792刊・京都）『雅語譯解』（鈴木胤編・1821刊・尾張）『類聚雅俗言』（東条義門編・1814成立・若狭）の三書を資料としてとりあげ、収録された俗言語彙の分析、三編者の雅俗意識、三書成立の影響関係と編纂様式の発達の推移について主に考察した。

前

1.

三書の表記は共通しており、俗言を片仮名で、雅言を平仮名で書き分けている。俗言の形態的（音韻・文法）特徴は、①四ッ仮名（ジヂズヅ）が二ッ仮名（ヂヅ）で表記されていること、②ハ行四段動詞連用形と形容詞連用形がウ音便化すること、③打消の助動詞はヌ（ン）を用いることなどの点で現代近畿方言とほぼ同じといえる。異なるのは④合拗音（クワ・グワ）と直音（カ・ガ）の表記上の区別があること、⑤指定辞はチャを多く使い、形容動詞終止形はナを多く使うことだけである。三書の俗言は近世後期上方語を反映しているとみせる。語彙の面からみると、現代の国語辞書に立項されていない語を多数含み、また、現代の方言に残されている語もかなり収録されており、近世後期の言語資料として高い価値を有する。

2.

三人の国学者の雅俗意識はほぼ一致している。雅言は中古語を指し、上代語と区別して使われている。俗言は方言と区別して使われており、凡例での記述や注釈から上方語を指すと思われる。単に近世の日本各地で使用された口頭語を俗と総称するのではない。上方語を中央の言語とみなし、上方中心の枠の中で雅俗の乖離を考え、中古語は中古の時代の上方語で、中古の

上方語と近世の上方語が乖離してしまったことを憂えて、中古の上方語を規範とするためにそれを雅と称し、雅俗語対訳を行っていると思われる。方言に関する注釈も若干みられるが、雅言と同じ語が地方の言語の中にみられるという意外な事実を特記しているにすぎない。つまり、俗言は上方語に限定して使われており、そのために雅と俗が対立しているのである。

3.

『詞葉新雅』と『類聚雅俗言』は俗言を見出しに立て、それに雅言を対訳している。『雅語譯解』は逆に雅言を見出しに立て、それに俗言を対訳している。まず、三書の全見出しを品詞論的に分類すると名詞の占める割合が低い。これは、一般の国語辞書は語義を調べることを目的とするのに対して、雅俗語対訳辞書は文章中での表現の仕方を調べることを目的とするため活用語や意味を把握し難い語（副詞等）を多く立項していることに因るものと思われる。また、俗言を雅言に対訳している『詞葉新雅』と『類聚雅俗言』の見出しを比較すると、見出し語の重複が少なく、『類聚雅俗言』は『詞葉新雅』に漏れている語を立項するという補遺的一面をもつという特徴が浮かび上がってくる。次に、見出しの排列方式は三書ともにイロハ順に部分けされているが、第二字以降の順序・音節数は規則性なく並べられている点は一致する。だが、『詞葉新雅』は俗言と雅言が意味上一対一の対応を必ずとるのに対し、『類聚雅俗言』は一項目内で雅言の場面に応じた使い分けや同音異義を示すという一対複の対応をとる項目が多くみられる点が異なる。この一対複の対応は『雅語譯解』でも数例みられる。また、辞書としての編纂様式を比較しても、『詞葉新雅』から『雅語譯解』へ、そして、『類聚雅俗言』へと内容が多岐にわたって加えられている。

以上のように三書成立の影響関係、ならびに、辞書としての発達の推移をあきらかにした。